

●京都大学 地球環境学舎

「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

本教育プログラムにおいては、国内外におけるインターンシップ・フィールドワークを基軸としたミニプロジェクトワークを実施した。可否を判定する基準は厳格に設定している一方で、合格に相当する学生の成績区分の判定については、共通の判定基準を設定することが難しく個別の担当教員の判断基準に委ねざるを得ない状況であった。

苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

インターンシップ、フィールドワークの成績区分の判定基準の作成において、「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」という観点からの基準作成が困難であった。分野横断的なプロジェクトワークを実施すること自体には学生からの一定の評価が得られたが、成績評価を実施する教員が同席することは難しく、従来通りの報告書の内容、受入機関担当者の評価に基づいて成績評価を行うこととなった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

問題解決のため、まず可否の判定基準は付与する単位数に相当する実習時間の確保、プログラムの内容、報告書の提出等を運営担当委員会により統一的に評価することで一定の厳格性を担保できたと考える。一方で、成績区分の判定においては指導教員の裁量に委ねる形を最後まで改善することができなかった。当初から統一的な成績評価指針、基準を策定しておけば、ある程度本事業の意義を成績評価に導入できたと考えられる。

●京都大学 地球環境学舎

「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

本教育プログラムでは「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」というコミュニケーション能力、およびそれに参画する学生のマネジメント能力の育成を目的とした。プロジェクトの成果として、これらの能力育成のためのプロジェクトワークにすべての学生が参加してはいるが、こういった類の能力向上を定量的に証明する方法が確立できておらず、効果を数値データとして表すことが難しい。

苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

具体的な成果として、分野横断型の修士論文研究の数自体は増加しつつあるが、サンプル数が少なく学位論文の質自体を評価することが難しいこと、コミュニケーション能力やマネジメント能力は、数値データとして評価することが難しいことが要因として挙げられる。そのため、修了生のアンケートにおいては概ね高い評価がなされているが、能力の向上については十分な評価にいたっていない段階である。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

学生の主体性を確保しつつも、各プロジェクトワークに教員がオブザーバーとして参画することによってプロジェクト活動の質の向上を図る、また成果発表会の公開など、質の向上に向けた取組みは一定の成果を上げたと考えられる。その一方で、「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」がどの程度達成できたかの明確化については上述したように課題が残り、今後の展開の中で方策を検討している。